

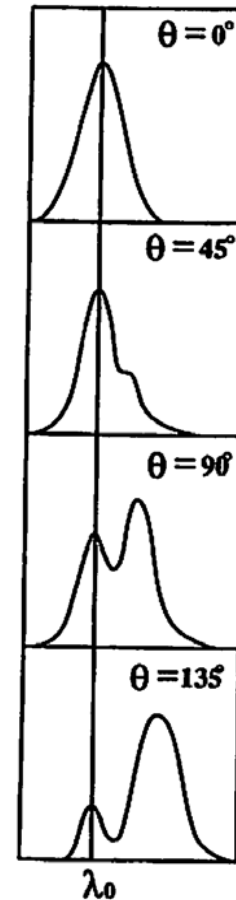
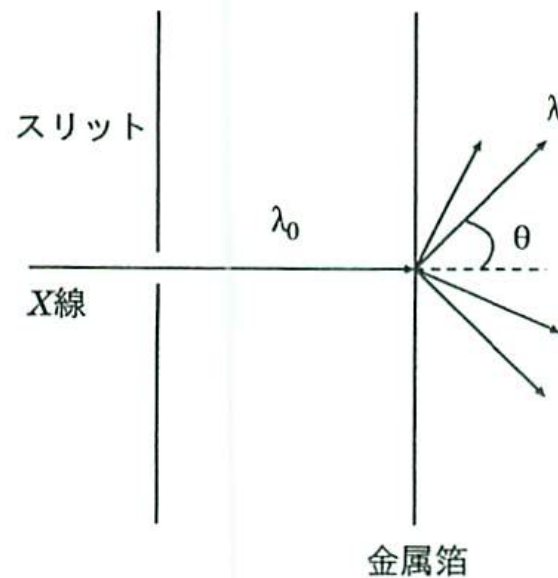
コンプトン効果またはコンプトン散乱

目次

1. コンプトンによる実験
2. 微視的過程—光子と電子の弾性散乱—
3. コンプトン効果の関係式(1)
4. コンプトン効果の関係式(2)

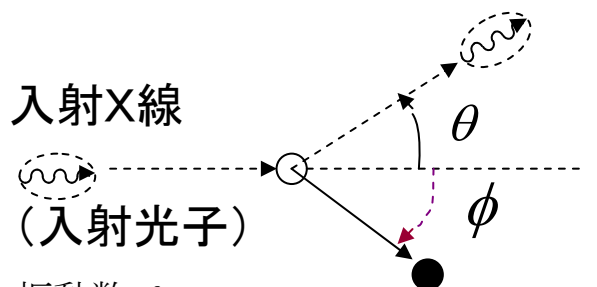
1. コンプトンによる実験

物質に(波長が数Åの) X線を照射すると、散乱Xの角度分布に、入射波と同じ波長の散乱X線とともに、波長の長くなる散乱X線と電子の放出が観測される。波長が同じ散乱をトムソン散乱と呼ぶ。波長の短くなる散乱を発見者に因んで、コンプトン散乱(またはコンプトン効果)と呼ぶ。



2. 微視的過程—光子と電子の弾性散乱—

実験事実を、コンプトンは離散的なエネルギーと運動量をもつ光子と静止した電子の弾性散乱と近似して(見なして)解析した。(特殊相対論を用いた分析)



散乱X線
(散乱光子)

入射X線
(入射光子)

反跳電子

振動数: f
 角振動数: $\omega = 2\pi f$
 エネルギー: $hf (= \hbar\omega)$
 運動量: $\frac{hf}{c}$

エネルギー保存則

$$hf_0 + mc^2 = hf + E,$$

$$E \equiv \sqrt{(mc^2)^2 + (cp)^2}$$

運動量保存則(入射方向)

$$\frac{hf_0}{c} = \frac{hf}{c} \cos \theta + p_e \cdot \cos \phi$$

運動量保存則(入射方向と垂直な方向)

$$0 = \frac{hf}{c} \sin \theta - p_e \cdot \sin \phi$$

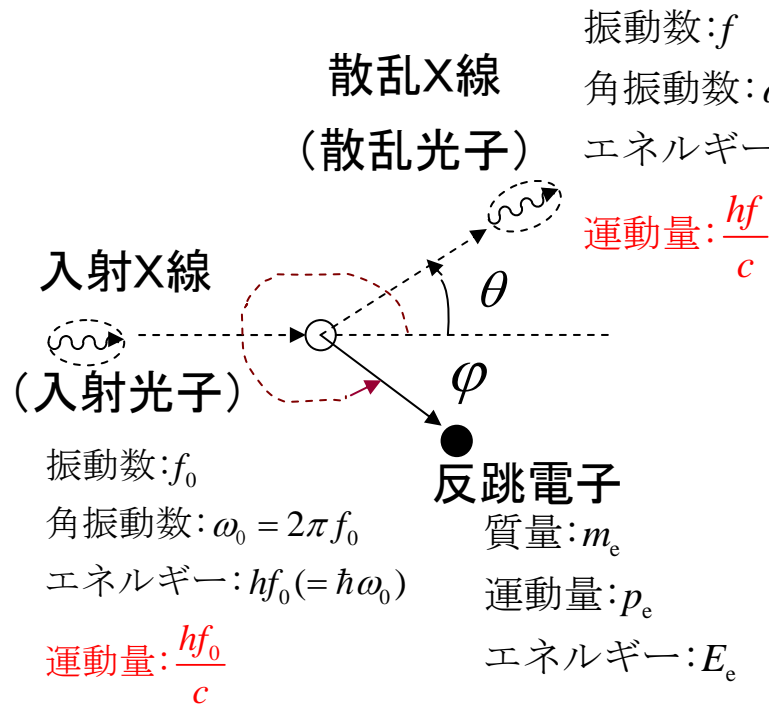
振動数: f_0
 角振動数: $\omega_0 = 2\pi f_0$
 エネルギー: $hf_0 (= \hbar\omega_0)$
 運動量: $\frac{hf_0}{c}$

質量: m_e
 運動量: p_e
 エネルギー: E_e

注意: 散乱角度を光子の入射方向から、
 光子に対しては反時計周りに、
 電子に対しては時計周りに取った。

2'. 微視的過程—光子と電子の弾性散乱— (電子の散乱角度の取り方を変えると)

実験事実を、コンプトンは離散的なエネルギーと運動量をもつ光子と
静止した電子の弾性散乱と近似して(見なして)解析した。(特殊相対論を用いた分析)



エネルギー保存則

$$hf_0 + mc^2 = hf + E,$$

$$E \equiv \sqrt{(mc^2)^2 + (cp)^2}$$

運動量保存則(入射方向)

$$\frac{hf_0}{c} = \frac{hf}{c} \cos \theta + p_e \cdot \cos \varphi$$

運動量保存則(入射方向と垂直な方向)

$$0 = \frac{hf}{c} \sin \theta + p_e \cdot \sin \varphi$$

反跳電子の散乱角度の2つの定義間の関係

$$\varphi = 2\pi - \phi$$

$$\rightarrow \sin \varphi = \sin(2\pi - \phi)$$

$$= \sin(2\pi) \cos \phi - \cos(2\pi) \sin \phi$$

$$= -\sin \phi$$

注意: 散乱角度を光子の入射方向から,
光子に対しては反時計周りに,
電子に対しても反時計周りに取った.

3. コンプトン効果の関係式(1)

散乱光子の波長 λ と散乱角 θ の関係

$$\begin{aligned}\lambda - \lambda_0 &= \left(\frac{h}{m_e c} \right) (1 - \cos \theta), \\ &= \lambda_{\text{compton}} (1 - \cos \theta),\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\lambda_{\text{compton}} &\equiv \frac{h}{m_e c}; (\text{電子の}) \text{コンプトン波長} \\ &= 0.024 \text{ \AA} = 0.024 \times 10^{-10} \text{ m}.\end{aligned}$$

波長の相対的変化率—コンプトン効果が無視できるかどうかの目安—

$$\begin{aligned}\frac{\lambda - \lambda_0}{\lambda_0} &= \frac{\left(\frac{h}{m_e c} \right)}{\lambda} (1 - \cos \theta) \\ &\equiv \frac{\lambda_{\text{compton}}}{\lambda} (1 - \cos \theta),\end{aligned}$$

$$\rightarrow \frac{\lambda_{\text{compton}}}{\lambda_0} = \begin{cases} 0.06 \text{ (6\%)} & \text{for } \lambda = 0.4 \text{ \AA} = 0.04 \text{ nm} = 0.4 \times 10^{-10} \text{ m}; \text{X線} \\ 0.000024 \text{ (0.0024\%)} & \text{for } \lambda = 1000 \text{ \AA} = 1 \text{ nm} = 10^{-7} \text{ m}; \text{可視光} \end{cases} \quad \text{for electron}$$

効果は有意の大きさで見なされる

効果は無視できる

半古典近似:

次のように、電子のエネルギー(=静止エネルギー+運動エネルギー)と運動量について、半古典近似を行っても、コンプトンの関係式が近似的に導出される。

$$E \cong mc^2 + \frac{1}{2}mv^2$$

$$p \cong mv,$$

$$(f - f_0)^2 \ll 2ff_0 \cdot (1 - \cos \theta) \longleftarrow \text{多くの実験的事実より}$$

$$\longrightarrow \lambda - \lambda_0 \approx \left(\frac{h}{m_e c} \right) (1 - \cos \theta),$$

4.コンプトン効果の関係式(2)

反跳電子の運動エネルギー K_e と光子の散乱角 θ の関係

$$K_e = \left(\frac{ch}{\lambda_0} \right) \frac{2 \left(\frac{\lambda_{\text{compton}}}{\lambda_0} \right) \cdot \sin^2 \left(\frac{\theta}{2} \right)}{1 + 2 \left(\frac{\lambda_{\text{compton}}}{\lambda_0} \right) \cdot \sin^2 \left(\frac{\theta}{2} \right)}$$

反跳電子の散乱角 ϕ と光子の散乱角 θ の関係

$$\tan \phi = \frac{1}{\tan \left(\frac{\theta}{2} \right) \cdot \left(1 + \frac{\lambda_{\text{compton}}}{\lambda_0} \right)}$$

参考文献

佐川弘幸、清水克多郎「量子力学」、シュプリンガー・フェアラーク東京
高田健次郎「わかりやすい量子力学入門」丸善株式会社
原田勲、杉山忠男「量子力学I」、講談社
猪木慶治、川合 光「基礎量子力学」、講談社